

小規模校における若年層教員の実践的指導力向上に関する研究 —3つの視点で「授業づくり」を高める若年層研修会のマネジメントを通して—

Improvement of teacher's skills for Young teachers at Small school
— Focusing on Management of a Young workshop —

道園 祐子 森 保 之 岡 井 正 義
Yuko MICHIZONO Yasuyuki MORI Masayoshi OKAI
(柳川市立中山小学校) (福岡教育大学教職大学院) (福岡教育大学教職大学院)

(平成30年8月28日受付, 平成30年12月3日受理)

キーワード: 小規模校, 実践的指導力向上, 若年層研修会

I. 問題の所在

1. 現代社会の要請

平成27年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」には、これからの時代の教員に求められる資質能力として、これまで不易とされてきた資質能力に加え、「自律的に学ぶ姿勢」¹⁾「キャリアステージに応じて求められる資質能力を高めていく力」¹⁾の必要性が述べられている。近年、大量退職・大量採用により教員の年齢構成が顕著に崩れ始めている。このような状況で、教員は「校内研修、校外研修など様々な研修の機会を活用したり自主的な学習を積み重ねたり」¹⁾しながら、チーム学校の一員として組織的・協働的に課題を解決していくことを通して、実践的な指導力を高めていくことが求められている。

2. 研究対象校の実態

研究対象校は、児童数148名、学級数7学級（特別支援学級1を含む）の小規模校である。職員数は11名（管理職、非常勤講師を除く）で、その半数以上が20代から30代前半の若年層教員である。単学級の小規模校では職員数が少ないため、学年経営や授業づくり、校務分掌等を協働で行う機会が少なく、個人にかかる負担は大きい。そのため、職員の関係性の構築を図り、協働性の意識向上を図ることは多忙感を軽減するのに不可欠である。

市内の小学校の多くが学年単学級の小規模校であり、若手教員が増えている。市教育研究所は若年教員研修会や授業改善研修会等の研修を行っており、OJT研修と校内研修を関連させることで、より効果的に教員の実践的指導力の向上を図る必要がある。

II. 先行研究の分析と用語の定義

1. 3つの視点について

渡邊(2007)は、学年単学級では実践を振り返る機会が持ちにくいこと、協働による組織的な練り上げの場が少なく研修が個人にゆだねられることが多いことを指摘している。渡邊の研究では、福島県教育センターのOJTツールを活用することで客観的な自己評価を行うことを可能にし、OJT実践者及びOJT支援者の実践的な指導力を向上させた。つまり、OJTツールにより自己の課題を自覚させることでOJT支援者が課題意識をもって実践し振り返ることが実践的指導力の向上に有効であることがわかった。

また、堀(2010)は「チームは、人と人とが織りなす関係性(絆)の集合である」²⁾と捉え、直接、人を変えるのではなく関係性をよりよくすることで人の能力ややる気を発揮できるようにするアプローチが「人的資源を活かすための最大のポイントである」²⁾と述べている。

本研究における課題性の視点とは、若年層教員が日常の実践から捉えた自己の課題や学校の課題、日常の関わりから他者が見出した課題を合致させる視点である。若年層教員に対しフィードバックを行うことで捉えさせたい課題を自覚させる。関連性の視点とは、校内研修等と若年層研修会の内容を関連させ、それぞれの学びをつなげる視点である。校内研修と若年層研修会の計画を一覧にし、矢印でつないで若年層教員に提示することで、学びをつなげる意識をもたせる。協働性の視点とは、個人や学校の課題を協働で解決することを通して、他者と学び、高め合う視点である。課題を共有し、解決する経験を段階的に積み重ねることにより、関係性の変容を目指す。

表2 視点1「授業づくり」の項目と内容

視点1 授業づくり	視点3 学校・学級づくり	視点5 省察・研鑽
①カリキュラムマネジメント	①重点事項の実現(学校)	②振り返り
②授業の組み立て	②リーダーシップ(学校)	②研修
③指導の工夫	③個人目標の設定(学級)	③教育界の動向
④内容の定着	④学級集団(学級)	④同僚性
⑤学習過程	⑤PDCA サイクル(学級)	⑤効率化
視点2 社会性・人間性の育成	視点4 協働・連携	
⑥基本的な生活習慣	⑥同僚との関係	
⑦生活状況	⑦同僚の会話	
⑧特別支援	⑧協働性	
⑨道徳的な実践力	⑨PTA 組織	
⑩生徒指導	⑩保護者	

項 目	内 容
①カリキュラム マネジメント	目指す児童像や重点目標を意識して、教科等の年間指導計画をもとに、児童が学んだことを次につなげる題材構成を行っている。
②授業の組み立て	児童の実態や教材の系統性を踏まえて授業を組み立てている。
③指導の工夫	普段から板書や発問、ノート指導等を工夫している。
④内容の定着	児童生徒に学習内容の定着を図るために、教材の工夫や家庭学習の習慣化等の工夫をしている。
⑤学習過程	児童の学習の必要性・目的を理解させながら、学習意欲が継続するように学習過程を工夫している。

表3 各視点の内容と方法

視点	内 容	方 法
課題性	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価による課題 ・自己の実践課題 ・若年層教員の実践から他者が捉えた課題 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践的指導力の自己評価 ・日常の会話により各個人の課題を聞き取る ・フィードバックにより課題への意識化を図る
関連性	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修等と若年層研修会の内容の関連 ・各研修の学びをつなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修計画一覧を作成し、研修の学びをつなげることへの意識化を図る ・学びをつなぐ若年層研修会の活動内容を設定する
協働性	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の共有 ・協働で課題を解決する教員の関係性の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を共有し、協働で解決する場となるように工夫する ・人と人をつなぐ声かけを行い、若年層研修会のしかけを工夫する

Ⅲ. 研究仮説と方法

The diagram illustrates the relationship between 'Practical Guidance' (実践的指導力の向上) and 'Practical Implementation of Junior High School Teachers' (若年層教員の実態) through three interconnected perspectives: 'Connectivity' (関連性の視点), 'Collaboration' (協働性の視点), and 'Thematicity' (課題性の視点).

関連性の視点 (Connectivity Perspective):

- 校内研修 (In-school training)
- 校外研修 (Out-of-school training)
- 内容の関連 (Content relevance)
- 若年層研修会 (Junior high school teachers' training session)
- 校内研修等と若年層研修会の関連を意識 (Consciousness of the relationship between in-school training and junior high school teachers' training session)
- 校内研修計画一覧 (Overview of in-school training plans)
- 学びをつなぐ活動内容 (Activities connecting learning)

協働性の視点 (Collaboration Perspective):

- 課題の共有 (Sharing of issues)
- 協働で解決できる場づくり (Creating a place where problems can be solved through collaboration)
- 関係性の質の高まり (Improvement of the quality of relationships)

課題性の視点 (Thematicity Perspective):

- 実践的指導力の自己評価 (Self-evaluation of practical guidance skills)
- 各個人が取り組みたい課題 (Issues that each individual wants to take on)
- 実践から捉えた自己の課題 (Issues identified from practice)
- フィードバック (Feedback)
- 実践や関わりから他者が見出した課題 (Issues identified by others from practice or involvement)

若年層研修会 (Junior High School Teachers' Training Session):

- 振り返り (Reflection)
- 改善 (Improvement)
- 実践 (Practice)
- 計画の見直し (Review of plans)
- 振り返り (Reflection)
- 改善 (Improvement)
- 実践 (Practice)
- 目標・計画 (Goals and plans)

図 1 研究構想図

3. CA 段階：前期若年層研修会の振り返り
4. D 段階：後期若年層研修会のマネジメント
- (1) 第 7 回若年層研修会の実際
5. CA 段階：若年層研修会の振り返り

IV. 研究の実際

- ### 1. P 段階：実態把握・研修計画

4月、若年層教員に声をかけ学級経営や校務分掌の相談等に応じながら実態やニーズを把握した。4月中旬、若年層研修会参加に対する意志を確認し、若年層教員5名に校内研修に対する意識調査(表4)と取り

表4 校内研修に対する意識調査 (H29.4.14, N=5)

項 目	とても	まあまあ	あまり	ぜんぜん
自由な意見交流ができる		2	2	1
研修の内容を理解している		5		
研修が実践に役立つ		3	2	
学びや気づきがある	1	3	1	
校内研修の内容に満足できる		2	3	

表5 アンケート結果 (2人以上が選択した項目) (H29.4.14, N=5)

視点	取り組みたい課題	人数
1	導入の工夫	3
1	教材分析	3
1	授業づくり	3
2	道徳の授業	2
2	人間関係づくり	2
4	保護者との連携・保護者対応	2
5	振り返りの方法	3

平成29年度校内研修計画					
月 週	主題研究(算数)	QJT (若年層研修会、教室訪問)	一般研修	行事等	校外研修
4月 ①	研修・研修計画・主題		配速を要する児童の連絡	10日入学式	
4月 ②	児童像・授業後の協議		10日ICT活用研	18日全国学力調査	
4月 ③		19若年研①計画	学力向上プラン提案・アレルギー対応	21日教団総会	
4月 ④				28日学習参観・給食	
5月 ①	2研究視察・授業後の共有		新体力テストに向けて		
5月 ②				28日運動会	市教研数科
5月 ③		18若年研②授業づくり			
5月 ④			学力調査分析・授業改善		
6月 ①	1指導案書讀1-①		不祥事防止(教道・運動)	新体力テスト	市教研道徳
6月 ②	2指導案書讀2-①			18日プール掃除	
6月 ③	15模擬授業1-②、2-②			20日福岡県学力調査	
6月 ④	22授業研・整理会1-③、2-③	22若年研③授業改善	同和問題啓発強調月間、ユニバースコンクール		

図2 校内研修計画一覧 (抜粋)

取り組みたい課題に関するアンケート (表5) を行った。対象者である5名中1名は平成29年度赴任してきた教員である。

校内研修に対する意識調査では、自由な意見交流ができないと感じている若年層教員がいることが分かった (表4)。取り組みたい課題に関するアンケートの結果は、視点1「授業づくり」(表1) の項目を選択している若年層教員が多く、視点2, 4 (表1) のニーズもあることが分かった (表5)。視点1への関心が高まったのは、校内研修の主題変更による影響と考えられる。そこで、二次次の若年層研修会は、視点1「授業づくり」に重点を置くこととし、校内研修と関連づけて行えるよう研究主任と話し合って校内研修計画一覧 (図2) を作成した。

(2) 若年層研修会説明会

表6 若年層研修会説明会の概要

日 時	4月19日 16:30～17:00
参加者	12名 (管理職、主幹教諭、学級担任、指導方法工夫改善担当、研究者)
目 的	若年層研修会の目的を共有し、職員がお互いの教育観を知って関わり合うことができるようにする。
内 容	若年層研修会の目的について説明し、教育観の交流を行う。

説明会では、まず、研究者が在籍校の職員の年齢構

成を示し、今後起こりうる柳川市の課題とともに若年層教員のニーズに応える研修の必要性を説明した。次に、若年層研修会の目的を説明し、人材育成に対する意識を高めた。そして、ベテラン教員と若年層教員が「教え、教えられる」一方向の関係ではなく、互いの教育観を知って関わり合うことができるようにするという目的を伝え、小規模校のよさを生かして、近接学年グループ (表7) で教育観の交流を行った。具体的には、自分が子どものころ好きだった先生を紹介し、どんなところが好きか、今の自分にどういった影響を与えているのかを伝えることを通して、それぞれの教育観を語り合う交流活動である。

表7 教育観の交流メンバー

グループ	メンバー
低学年	1年担任 (若)、2年担任、指導方法工夫改善担当 (若)、校長
中学年	3年担任 (若)、4年担任、特別支援学級担任、教頭
高学年	5年担任 (若)、5年担任 (若)、主幹教諭、研究者

(3) 若年層研修会計画作成 (第1回若年層研修会)

表8 第1回若年層研修会の概要

日 時	4月19日 17:00～17:20
参加者	若年層教員5名、研究者
目 的	若年層研修会の計画を若年層教員自らが作成することで、校内研修等と学びを関連させる意識をもたせる。
内 容	・若年層研修会の特徴について説明する。 ・若年層研修会の計画を立てる。

まず、研究者が若年層教員にアンケート結果をまとめた課題一覧 (表5) と校内研修計画一覧 (図2) を提示し、学びを生かすことができるよう校内研修と関連づけて若年層研修会を計画するよう伝えた。昨年度、若年層研修会を経験した教員が中心となって課題一覧と校内研修計画一覧を見ながら意見を出し合い、研修計画を作成した。

表9 若年層教員が作成した若年層研修会の計画

内 容	関 連
第1回4月19日 若年層研修会計画作成	
第2回5月17日 視点1 授業づくり (教材研究) 1年「たし算 (1)」 6年「資料の整理」	関連性 校内研修提案授業 キャリアアップ講座の授業
第3回6月23日 視点1 授業づくり (教材研究)	関連性 校内研修 課題性 実態から
第4回7月26日 前期若年層研修会の振り返り 「資料の整理」の系統表作成	
第5回8月5日 視点1 授業づくり (指導案作成)	課題性 実態 関連性 校内研修
第6回9月7日 視点4 保護者との連携 (対応)	課題性 ニーズ 関連性 教員免許更新講座
第7回11月22日 視点1 授業づくり (板書・発問)	課題性 実態から 関連性 校内研修
第8回12月6日 若年層研修会の振り返り	

〔若年層研修会説明会と計画作成の考察〕

研究者が、若年層教員が取り組みたい課題の一覧と校内研修計画一覧（図2）を提示し、関連性の視点を示したことで、若年層教員自らが各研修の関連を意識して若年層研修会の計画について提案する姿が見られた。また、若年層研修会後、積極的に若年層教員に声をかけるベテラン教員の姿が見られた。その後も、若年層教員からベテラン教員に授業の相談をしたり、ベテラン教員が声をかけたりする姿が日常的に見られる（小規模校のよさ）。このことから、協働性の視点で全職員に若年層研修会の説明会を行う場を設定した効果がうかがえる。

2. D 段階：前期若年層研修会のマネジメント

(1) 第2回若年層研修会の実際

表 10 第2回若年層研修会の概要

日 時	5月17日（金） 16:30～17:30
参加者	若年層教員5名、研究者
提案者	若年層教員 A、D
目 的	校内の授業研究会や福岡県教育センターのキャリアアップ講座の授業に向けた教材分析を行い、教科書を比較する教材分析の方法を学ぶ。
内 容	・「たし算（1）」「資料の整理」の教材分析を行う。 ・他社の教科書と比較し、問題の構成をつかみ、授業をつくる。

①課題性の視点によるマネジメント

若年層教員との日常的な関わりから各々の課題を把握し、授業観察により捉えた課題をフィードバックした（図3）。そして、共通となり得る課題は教科書を使った授業づくりの基礎を学ぶ必要があると考え、教材研究を通して授業づくりの基礎を学ぶことができるように内容設定した。

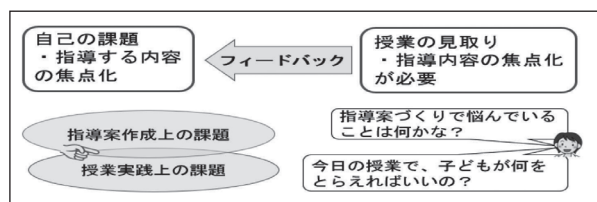


図3 フィードバックした内容と合致させた課題①

②関連性の視点によるマネジメント

主題研究の研究構想と目指す授業像の共有と指導案審議の間に若年層研修会を位置づけることにより、研究構想の具現化を図る。

5月	①	2	研究構想・授業像の共有	
	②	11		
	③	18		18 若年研②授業づくり
	④	25		
	①	1	指導案審議1-①	

図4 校内研修と若年層研修会の位置づけ

③協働性の視点によるマネジメント

提案者には、他の若年層教員に教科書のコピー等を

配り、どんなことを話し合いたいかな伝えておくように声をかけ、提案者以外には、あらかじめ教科書等を見て自分の考えをもって研修会に参加するよう声をかけた。

〔第2回若年層研修会の実際と考察〕

まず、研究者が「たし算（1）」と「資料の整理」それぞれの教材分析のポイントを説明し、2グループに分かれて授業づくりを行った（課題性の視点）。「たし算（1）」のグループでは「合併」の問題か「増加・添加」の問題かを確認し、各問題場面で何をつかませるとよいのか、操作や板書・ノート等について教科書を比較ながら話し合った。その際、他学年とのつながりを意識し、校内の主題研究に沿った授業となるように、研究者が話し合いをファシリテートした（関連性の視点）。最後に、それぞれの教員の今年度の目標を共有し、若年層研修会の振り返りを行った。提案者である教員 A、D が話し合いたい内容で交流が行われるように、研究者が事前に聞き取り、その内容を踏まえて資料を提供したことで話し合いが焦点化された。また、研究者が他学年とのつながりを意識してファシリテーターを務めたことで、教員 C が系統を考え、自分の学年の授業の課題を見出すことができた（表11）。協働性の視点で、研究者が、提案者と提案者以外の教員に声をかけ、研修への意識を高めたこと、研究者が捉えた若年層教員の課題を踏まえた資料提供を行い、基本的な事柄をおさえながら研修会を進めたことが高い満足度につながったと考える。

表 11 第2回若年層研修会の満足度

教員	満足度	理由
A	5	「たし算（1）」では、どこを大切にし、何をねらいにするのか再確認できた。
B	5	「資料の整理」の授業では、何を大切にすべきかがわかった。
C	4	他学年との系統を考えて教材研究ができた。自分の課題も見つかった。
D	5	授業の展開等の見通しがもてた。指導案が書けそう。
E	5	教材分析だけでなく、授業以外での学び方等も話すことができた。

(2) 第3回若年層研修会の実際

表 12 第3回若年層研修会の概要

日 時	6月23日（金） 16:30～18:00
参加者	若年層教員5名、ベテラン教員1名、研究者
提案者	研究者
目 的	学力分析を授業改善に生かすために、系統を意識した指導の在り方を考える。
内 容	6年「分数÷分数」の学習までに各学年で身に付けておくべき力について話し合い、系統表を作る。

①課題性・関連性の視点によるマネジメント

校内研修で行った全国学力調査の分析結果を日常の授業改善につなげることは学校全体の課題である。また、6年の分数指導については意味理解を図るために学年をさかのぼって復習しなければならないという児童の実態があった。

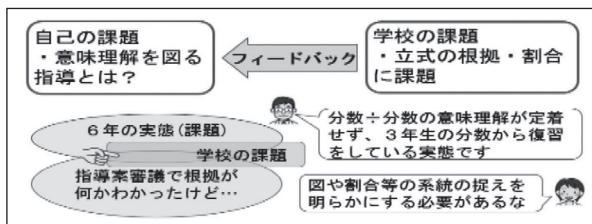


図5 フィードバックした内容と合致させた課題②

そこで、フィードバックにより意味理解を図る授業について意識化を図り、研修会では系統を意識した「授業の組み立て」（表2、項目②）を考えることが本課題の解決につながると考え、活動内容を設定した。

②協働性の視点によるマネジメント

協働性の視点を重視して場づくりを行った。具体的には、「分数÷分数」を自力解決できる児童を育てるために、各学年でおさえるべき内容を自分の担当学年の教科書から探し、付箋に書き出し整理する活動である。各々が付箋に書き出した事柄について説明し整理しながら貼ることで、縦のつながりを意識したり、足りない部分を補ったりして系統表を作り上げた。

〔第3回若年層研修会の実際と考察〕

研究者が、6年「分数÷分数」の授業の課題を捉えて活動を設定したことで、6年児童のつまずきの具体を共有し系統を考えることができ、各学年でおさえるべき内容とその定着の重要性、教材分析への理解が深まったと推察される。研究主任である教員Aは研究主題との関連を見出し、「校内研修で全教員でも取り組みたい」と述べた。その後、2学期の授業に向けて全担任が系統表作りを行う校内研修を企画した。学校の課題解決のための内容設定（課題性の視点）と校内研修と関連づけた（関連性の視点）ことによる効果がうかがえる。さらに、系統表を作成することで縦の系統を視覚化することができた。教員Dは作成した系統表を教室に掲示し児童と共有したことで児童の意識の変容にもつながったと後に述べた。しかし、研修会は予定時間を超え、考えの整理が不十分であったことから、教員Cは「途中で話についていけなくなった」と述べた。理解を確かめながら進めるための時間の確保が必要であったと考える。

表13 第3回若年層研修会の満足度

教員	満足度	理由
A	5	系統がよく分かった。領域をこえて関連を見ることができた。
B	5	算数の系統の大事さを理解した。
C	4	系統を知る大切さを学ぶことができた。授業に生かしていきたい。
D	5	系統を整理すると、どの学年のどこまで戻って指導するかが視覚化できる。これを児童にも見せたい。
E	5	系統が具体的に見つけられて、算数の授業づくりに対して、より気合いが入った。

3. CA段階：前期若年層研修会の振り返り

表14 第4回若年層研修会の概要

日時	7月26日（水） 16：30～17：30
参加者	若年層教員5名、研究者
提案者	研究者、若年層教員D
目的	若年層研修会の振り返りを後期の活動に生かす。6年「資料の整理」の系統表を作成することで系統を意識した授業実践に生かす。
内容	実践的指導力の自己評価、若年層研修会の学びの効果について振り返る。6年「資料の整理」の系統表を作成する。

表15 前期若年層研修会の振り返り（抜粋）

教員A：	授業研の前に若年研を行ったことで、指導案審議に積極的に参加 ¹ できた。また、数直線図をもとにした全学年の系統表は一人では難しくてなかなかできないが、みんなで行ったことで系統が分かるようになったし、授業で大事にしたいことが明確になった ³⁰ 。若年同士で話すことが増え、悩みをベテランにきけるようになった ⁴ 。
教員B：	算数では、学習の縦のつながりが見出せたことから何を重点で教えるのかを感じ取る ⁵ ことができた。他の先生の授業を見てみたい。
教員C：	授業中、系統性を捉えさせるために「何年生まで戻った方が良いか」など研修会で学んだ内容が増えた ⁶⁰ 。先生方に助けていただいたので、恩返しができるように頑張りたい ⁷⁰ 。
教員D：	自己評価により授業の組み立てや系統性に課題があると捉え意識して実践 ⁸ した。若年研で学年の系統性を整理したり、指導のポイントを協議したりすることがとても役立った。児童とも系統表を共有でき、他の領域でも系統を意識した指導を行うことで児童の意識にも変化 ⁹ があった。
教員E：	系統を見直すことができ既習を生かす場が多いことを再確認できた。各学年どの単元も大事である。そこで身に付けておくべき量感や数と量の関係を身に付けることの大切さを学んだ ¹⁰⁰ 。普段から意識していきたい。

算数の授業づくりや実践に関する新たな気づきや学びを述べている（表15、下線部3, 5, 6, 10）ことから、自己評価や日常の関わりの中から見出した課題を解決する課題性の視点によるマネジメントの効果がうかがえる。また、教員Aが指導案審議に積極的に参加できた（表15、下線部1）ことから関連性の視点によるマネジメントの効果がうかがえる。さらに、会話や悩みの相談等が増えた（表15、下線部4, 7）こと、一人では解決できないこともみんなで解決できることの体験（表15、下線部2）、同僚の関係性の構築を意識した協働性の視点によるマネジメントの効果がうかがえる。教員Dは自己評価により自己の課題を意識して実践し、系統表は授業によって児童も変容させた（表15、下線部8, 9）。

そこで、後期も小規模校のよさを生かして、日常の関わりや授業観察を通して若年層教員の実態を把握しながら若年層研修会の計画に沿って活動を設定していくことにした。

4. D 段階：後期若年層研修会のマネジメント

(1) 第 7 回若年層研修会の実際

表 16 第 7 回若年層研修会の概要

日 時	11 月 22 日 (水) 16:30 ~ 17:30
参加者	若年層教員 5 名, 研究者
提案者	研究者
目 的	板書や TC を考え, 校内研修で目指す具体的な授業イメージを共有する。
内 容	5 年「分数 (2)」の授業づくりを通して, 導入や見通し, 児童の考えからまとめまでの授業の流し方について話し合う。

①課題性の視点によるマネジメント

研究者が若年層教員の授業観察を通して, 課題意識や見通しをもたせる導入段階, 児童の考えを取り上げ高めていく展開段階の具体についての研修が必要であると考える。そこで, 話し合いが学校の子どもたち全員に共有されているか問いかけ意識化を図った。

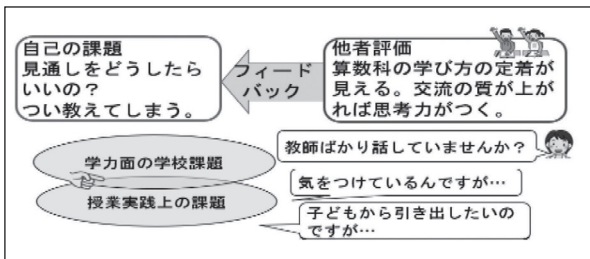


図 6 フィードバックした内容と合致させた課題③

②関連性の視点によるマネジメント

主題研究で目指す授業像の具体について話し合い, 実践につなげることができるように初任者が課題としている第 5 学年の単元を取り上げた。

③協働性の視点によるマネジメント

事前に次の若年層研修会では全員が模擬授業を行い具体的な授業の流し方について学び合うことを伝え, 5 年「分数 (2)」の導入場面の流れ (TC) を考えておくように課題を出した。

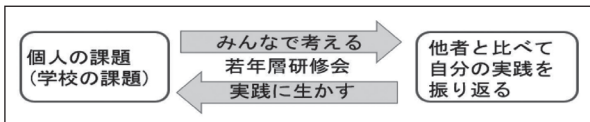


図 7 他者との比較で自分の実践を振り返る活動の工夫

〔第 7 回若年層研修会の実際と考察〕

事前課題は導入だけでもよいと伝えたにもかかわらず全員が一単位時間の流れを考えており研修への意欲がうかがえた。若年層研修会では研究者が学び合う授業づくりの基礎, 交流場面での教師の役割について資料を使って説明した後, 「全員, 模擬授業をしよう」と呼びかけ, 教員 B が立候補して導入場面の模擬授業を行った。表 17 はその後のやり取りである。

教員 B が積極的に手を挙げ, 導入部分の模擬授業を行った後, 教員 A が自分の実践した経験から悩み

表 17 第 7 回若年層研修会のやりとり

教員 A: (略) 以前, 授業をして悩んだのは見通しの部分だった。面積図を初めて扱うので自分がひっばるような授業 ¹ になった。
研究者: では, どう展開したのかやってみて。
教員 A: 自分は, まず, 答えを予想させました。そして, (黒板にかきながら) 予想した答えについて図をかくて検討して, 「この答えはおかしいよね」といって… (略)
研究者: 一問一答を繰り返しながら教師が教えていったのかな ² 。
教員 A: そうです。
研究者: この部分で, 他の先生方はどう展開しますか。
教員 E: わたしは, 面積図の「面積」という言葉に着目させるところから説明します。「面積」だから, 「縦×横だよ」と言ってから 1dL でぬれる面積を図で表すように考えさせます。次に, 1 ますの部分の面積を考えさせ, $1/5dL$ であることを確認します。(略)
研究者: E 先生は, さきに $1/5dL$ を教えるんですね ³ 。
教員 E: はい。(略)
研究者: 次は, どちらからしましょうか。
教員 D: (略) 見通しでは, $3/5$ の意味を問い, $3/5 \times 4$ だから, (1 を 5 つに分けた 3 つ分) の 4 つ分であることをおさえます。(略)
研究者: E 先生と $1/5dL$ をおさえるタイミングが違いますね ⁴ 。C 先生, この図で子どもはどのように説明しますか?
教員 C: $1/5dL$ が 1, 2, 3…12 あるので $12/5$ です。
研究者: この説明を $\triangle/\square \times \bigcirc = (\triangle \times \bigcirc)/\square$ のまとめにもっていくためにどうしますか?

を発言した (表 17, 下線部 1)。この発言によって話し合う内容が焦点化された。そこで, 研究者が, 教員 A の悩みを具体的に共有するために実際に板書しながら説明するように促した (表 17, 下線部 2)。研究者はそれぞれの考えを整理しながら話し合いを進め (表 17, 下線部 3, 4), 交流場面からまとめにつながるまでの授業イメージを全員で共有した。その後, 資料をもとに, 交流場面で教師がどのように児童の考えを引き出したり広げたりしていけばよいのか説明し, 参考文献を紹介した。研修会を自分事として捉え, 学びを実践につなげるには, 教員 A のように実践の悩みを語ること (表 17, 下線部 1) が重要である。この発言をきっかけに教員 A の悩みや疑問に答えるように各教員が自分の見通しや展開に対する考えを出し合うことができたと考える。1 つの授業に対して, 各教員が授業の具体を出し合うことで自分の授業を振り返る機会となり, 高い満足度につながったと考える (表 18)。

表 18 第 7 回若年層研修会の満足度

教員	満足度	理由
A	5	自分の疑問が解決し, 見通しについての理解が深まった。
B	5	自分の授業と比べ, 振り返ることができた。
C	4	みんなの考えを聞き, 授業に生かすことができる。
D	5	他の先生の実践から, 見通しでは何をどこまで示すかを考えることができた。
E	5	いろんな考えを聞いて, 自分の考えた流れをもう一度考え直そうと思った。

5. CA 段階：若年層研修会の振り返り

表 19 若年層研修会をどう生かしているか

教員 A：(略) 意味理解を大切に「授業づくり」を心がけるようになった。系統を考えたことで、授業を観る視点が変った。(略) 他教科でも系統を整理したい ² 。と思っている。最近の授業では、ゆさぶり発問・深まるような発問ができてきた。導入を工夫し、めあてを子どもが考えることができるようにしている ³ 。
教員 B：導入の発問を工夫している。特に、めあてとまとめは子どもが言えるように工夫している ⁴ 。(略) 縦の系統の学びは、授業中既習の振り返りの際に意識するようになった ⁵ 。
教員 C：全学年の教科書(学習内容)を見て系統表を作成したことで既習の捉え方が広がり、面積の授業で生かした ⁶ 。先生方の専門性を知り、悩みを相談しやすくなった。(略) 若年研を通して、先生方の教育観や授業観を知り、目標ができた ⁷ 。
教員 D：第7回の研修会では、見通しのもとせ方がそれぞれ先生によって違うことを知り、授業では考えの表現の仕方を限定しない方がいいんだと思った。(略) 「その子にとってのわかる」を考えるようになった ⁸ 。今まで系統は教師が意識しておけばよいと思っていたが、子どもに意識させることのよさを知った。子どもが既習を用いると問題が解けるのだと考えるようになった ⁹ 。(略) 若年研で共通理解しているから、その前提で声をかけ合うことができる ¹⁰ 。
教員 E：他社の教科書を比較するようになった。系統では落ちているところを意識して指導している ¹¹ 。(略) 納得しない子がいると授業が面白くなる。なぜ? 本当にそうかな? と考える子が増えるといいと思う ¹² 。

第2回若年層研修会では提案授業の教材分析を行ったことで授業研究会への積極的な参加につながり、「めあてとまとめは児童が考える」という授業の共有が図られたと推察される(表19, 下線部3, 4)。第3回若年層研修会では、学校の課題と6年の実態から活動を設定したことで全教員が系統を意識した授業づくりを行っている(表19, 下線部2, 5, 6, 9, 11)。また、主題研究で目指す算数科の授業像や児童像の共有が図られ、実践していること(表19, 下線1, 3, 4, 8, 12)がうかがえる。さらに、若年層研修会の話題をもとに声をかけ合えること(表19, 下線部10)、初任者が悩みを相談するだけでなく、子どものよりよい成長を願う先輩教員の教育観や授業観に触れ、目標をもつことができたこと(表19, 下線部7)から、関係性の質の高まりがうかがえる。若年層教員それぞれが学びを実践に生かしているのは、3つの視点による若年層研修会のマネジメントの成果と考える。

若年層研修会に関する聞き取りを行った結果、若年層教員の5名中4名が若年層研修会で重点的に扱った視点1「授業づくり」に役立ったと回答した。具体的な内容(表21, 下線部3)や実態に応じた交流(表21, 下線部4)であったことが理由として述べられ、小規模校のよさを生かし、日常の関わりからより実態に応じた課題を見出した課題性の視点によるマネジメントの効果がうかがえる。また、5名中4名がモチベーションの向上に役立ったと回答した。これは、「やってみたいと思える研修会」(表21, 下線部1, 7)であっ

表 20 若年層研修会に関する聞き取り調査項目

若年層研修会は何に役立ちましたか。
①授業づくり ②授業実践 ③学級経営 ④校務分掌 ⑤自己研鑽 ⑥モチベーション ⑦職員の人間関係構築

表 21 表 20 の質問に対する回答

教員 A：⑥が一番。次に①②③。みんなでわいわい言いながら考えるとやってみようと思う ¹ 。通常の研修会では受け身になってしまうが、ききたいことがきけるし、言いやすい。自分達でするから学んだことが残る ² 。
教員 B：①②。教材研究(ノート)を見せ合ったこと、具体的な内容だったこと、授業の実際を聞いたことがよかった ³ 。
教員 C：⑥が一番。次に①②③。子どもの実態を共有しているので、〇〇さんを想定した話し合いができるから ⁴ 。実践に結びつけやすい。
教員 D：順に⑥⑤⑦③。一番はモチベーション。提案するために勉強したり、研修のために事前に考えたりすることが楽しい ⁵ 。⑦は学びの共有(共通理解)による関わり方の変化があった ⁶ 。③は(子どもの考えを生かす)授業を通した学級経営ができた。
教員 E：①②⑤⑥。知らないことが知れる。やってみたいと思える。(略) 実際にやってみた ⁷ 。本の紹介で読んでみたいと思った。

たことが要因と考えられ、「ききたいことがきける、自分たちでするから学びが残る」(表21, 下線部2)という発言から、個人、あるいは学校の課題を共有し解決するという協働性の視点によるマネジメントの効果がうかがえる。さらに、教員 D は「(自分が)提案すること」や「事前学習」そのものが自己研鑽となっている(表21, 下線部5)。そして、系統を児童に意識させることで一人ひとりの考えを生かす授業を意識するようになり、学びを学級づくりへ発展させ、学級経営に手ごたえを感じている(表21, 下線部6)。

3つの視点によるマネジメントで行った若年層研修会は、小規模校のよさを生かして、経験年数の違う教員が互いに刺激し合い、自己の実践を振り返る機会となり、それぞれの気づきや学びに役立ったと推察される。

3つのマネジメントによる関係性の質の高まりは、モチベーションの向上にも役立っていることが明らかになった。

V 考 察

(1) 若年層教員の実践的指導力(授業づくり)の自己評価から

若年層研修会で重点を置いた視点1「授業づくり」については、4月と12月の平均を比較すると、経験

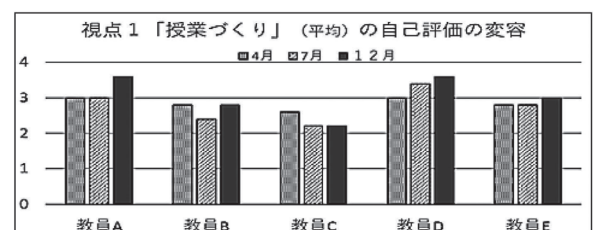


図 8 視点1「授業づくり」の自己評価(平均) N=5

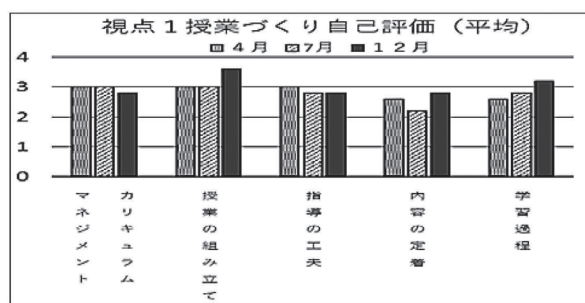


図9 「授業づくり」の項目ごとの自己評価（平均）
N=5

年数4～6年の教員と指導方法工夫改善担当は0.3～0.6上がり、講師は維持、初任者は0.4下がっていた。講師や初任者がのびていないのは、若年層研修会を通して教材分析や系統の捉えの深さを知り、自己の課題が見つかったことが要因の一つと推察される。

視点1「授業づくり」の自己評価の平均を項目ごとに見ると、第3回若年層研修会で行った系統に関する「授業の組み立て」、全体を通して扱った「学習過程」の数値が上がっている。「授業の組み立て」については、7月には上がらなかったものの校内研修で繰り返し系統表を作成する活動を行ったことで理解が深まり、12月に向上したと推察される。

以上のことから、若年層研修会は実践的指導力（授業づくり）の向上に一定の効果があったと考えられる。

(2) 管理職による若年層教員の評価から

表22 管理職による若年層教員の実践的指導力の評価

教員	高く評価された視点・項目とその理由
A	視点1「授業の組み立て」「指導の工夫」内容をきちんと把握して授業づくりを行っている。研究主任として他の職員に助言ができる。
B	視点1「学習過程」、視点3既習とのずれから子どもに学ぶ目的をもたせている。体育主任としての職責を果たしている。
C	視点1「学習過程」、視点2授業スタイルを大切に板書計画を立て授業している。特別支援教育への理解、児童理解に努めている。
D	視点1、視点4年間を見通し、計画的な指導、教科内・教科間の学びを関連づけた指導ができる。同僚への声かけ、保護者との連携ができる。
E	視点1、視点4教材研究等に励み、系統を踏まえた指導、個に応じた指導の工夫ができる。積極的に担任や分掌事務の支援ができる。

管理職による評価（視点1を中心）と若年層教員の自己評価はほぼ一致しており、管理職や研究者によるフィードバックが適切に行われたことがうかがえる。若年層研修会で行った内容に関する管理職による評価は5名とも高い。若年層教員が学びを意識的に実践できたのは、3つの視点による若年層研修会のマネジメントの成果と考える。

IV. 成果と課題

小規模校のよさを生かし、日常の関わりから若年層教員の課題を捉え、協働で解決する若年層研修会を行うことは、実践的指導力（授業づくり）の向上はもちろんのこと、同僚の関係性の向上にも有効であった。しかし、小規模校では若年層教員の課題に応えるのできる人材が不足しているのも現状である。そこで、校外研修との関連を図る必要がある。また、今後、自律的に学び続ける教員の育成を目指すためにはキャリアを意識した自己評価表と関連づけた若年層研修会の在り方も考える必要がある。

引用文献

- 1) 中央教育審議会答申 2015 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について
- 2) 堀公俊 2010 チーム・ファシリテーションー最強の組織をつくる12のステップー 朝日新聞出版 36-38
- 3) 福島県教育センター 2008 「学校経営・運営ビジョン」実現のための組織力、特に教師力の在り方

参考文献

- 岩瀬直樹 2014 せんせいのつくり方 “これでいいのかな” と考えはじめた “わたし” へ 旬報社
- 福岡県教育センター 2013 校内研修のすすめ方 ぎょうせい
- 中原淳 2017 はじめてのリーダーのための実践！フィードバック PHP 研究所
- 渡邊かおり 2007 小規模小学校における教師の実践的な指導力向上を図る研修の在り方 福島県教育センター長期研究員研究報告書